

特集 No.1

商店街の化学反応

関わり合うまちへ

日高 史帆

人でつくる商店街

シャッターの数だけ、歴史がある。店舗の機能を終えたシャッターの内側には、かつての店主が商いを引退し、土地を離れず暮らしている。商店街を形作るのは、賑わいだけではなく、今ある暮らしを含め、「そこに関わる人がある」ということである。

名古屋市が取り組む「商店街オープン（※）」が事業の主軸としているリノベーションは、まちをゼロから作り変えるのではなく、今ある資産をベースに、それを魅力的に見せるための手法である。これは、建築的なものに限らない。人が関わることによりまちに新しい魅力を生むことができる。

昨年度の商店街オープン2018では三つの商店街にそれぞれ新しい

店舗がオープンした。様々な人が関わり、そのまちに合った業種や運営方法を設計した。どのような人が関わりどんな魅力が生まれたのか、ご紹介する。

喫茶モーニング：名古屋駅西銀座通商店街（中村区）に昨年五月にオープンした、モーニング文化を発信する喫茶店。商店街オープンのワークショップには、名市大林研究室や大ナゴヤ大学も参加し、地域分析を行った。空き店舗の借主は、商店街の近くに拠点を置く引きこもり支援活動を行うNPO団体で、外国人向けゲストハウスのオーナーにサブリースしている。若者の就労支援の場とするなど、フラットに誰でも受け入れられる場を目指す。

かさでのまち食堂：笠寺観音商店街（南区）に昨年五月にオープンしたワンデイシェフの飲食店。一日では味わいきれない形式が魅力。運営委員会が初期投資や経営リスクを負担することで、シェフの負担を軽減。常に約十名のシェフを確保している。店頭を小高いスペース「ちょい見世」として使用するなど、まちに開く小さな仕掛けが施されている。さらなる取り組みとして、上階を民泊やレンタルキッチン、コワーキングスペースにする工事が進行中。

ニシヤマナガヤ：西山商店街（名東区）に昨年九月にオープンした複合店。一

店舗あたりの面積が大きい（＝家賃が高い）ため、店舗が定着しづらかったが、その広い空間を活かし、焼き菓子屋、花屋、珈琲屋等、計六テナントを誘致。店舗数の少ないこの商店街に、一気に六つ開業したことで華やいた。「西山のリビング」をコンセプトとし、くつろぎの場を提供しながら、それまで商店街がメインターゲットとしていなかった周辺若い世代をお客として取り込むことで、商店街へ刺激を与えている。

商店街オープンの目標

上記のような主体的な関わり以外にも、様々な関わりが生まれた。例えば、DIYイベントやプレオープンイベントに参加して地域を盛り上げる人、クラウドファンディングに協力する人、足繁くお店に通う人、SNSの記事を積極的にシェアする人など、人により様々な関わり方があった。商店街オープンで生まれた人の関わりは、まだまちを大きく変えるほどの力があるわけではないが、この一店舗の開設は、少しずつまちに影響を与え始めている。

今年度事業では、堀田本町商店街（瑞穂区）と柴田商店街（南区）でワークショップが進行中である。店舗の開店はもちろんだが、関わる人を増やすことがこの事業の第一目標である。人とまちがどんな化学反応を起こすのか、楽しみである。



ニシヤマナガヤ1階。焼菓子屋、珈琲屋、花屋が並ぶ



かさでのまち食堂の大机は隣同士の交流を生む



喫茶モーニングでは、日中モーニングサービス付き

※正式名称：商店街商業機能再生モデル事業（名古屋市 2018 年度～）。リノベーションによる空き店舗再生の取り組みを支援する。事業周知のためのキックオフセミナー（6月頃）、空き店舗活用を検討するワークショップ（11～2月頃）、改修工事費用の補助（次年度）の三本柱で進める（ワークショップおよび補助の対象は、市内の商店街から公募）。(株)ナゴノダナバンクと弊社が共同で受託。企画・運営を行う。